

「名曲の舞台を訪ねて」

“ある恋の物語”



歌は世界の人々の心をつなぐ

“Ya no estás más a mi lado corazón, en el alma solo tengo soledad・・・”

恋の破綻と不遇を嘆く美しい詩ですね。それにもまして、明るい哀調を帯びた曲の美さが、世界中のラテン音楽愛好家の心をとりにしてきました。

作詞・作曲はパナマのカルロス・エレッタ・アルマラン。1918年、パナマに生まれましたが、両親ともに生まれはスペイン。彼自身も中学校まではパナマで学んだ後、スペインのマラガで高校を卒業しています。その後、アメリカに渡りブライアント・カレッジで経営学士のタイトルを修めました。

1941年、卒業と同時に結婚、4人の子供をもうけました。パナマに戻った彼は、父親のタバコ卸の仕事で、企業家としてダイナミックな活動をするなか、コスタリカとの国境に近いチリキ地方の農園で競馬うまの養育をしたり、ボクシングに興味を示していました。そして心に詩が浮かんでくると、ピアノの前に座り、曲ができあがるまでそのメロディーを探っていたといいます。最初の作品はボレロ「ノスタルヒア（郷愁）」。続いて「君から遠く離れて」など次々と発表。こうして彼の最高作といわれる「ある恋の物語」は1956年に作られたのです。

歌のテーマは兄フェルナンドの妻の突然の死を悼んだものといいます。一方で、カルロス自身が彼女に横恋慕して、叶わぬ間柄への複雑な心情が曲に映り出ている、と解釈する人もいます。心に残る美しい曲と詩なるがゆえに、後世の人々がいろんな推測や解説をすることもあるのでしょう。

ともあれ、歌は残り、うたい継がれてきました。筆者も稲門会（早稲田の校友会）のカラオケサークルなどで、仲間から「オリジナルのスペイン語で歌ってみてヨ」と声をかけられる曲の一つです。残念なのは、みんなは私の歌唱の素晴らしさ(?)よりも、「きれいな曲だねえ」と、曲そのものだけをホメルこととです。

昨年11月、私はそんな曲のルーツを求めて、他の用件と合わせて10年ぶりにパナマを訪れました。パナマ独立のシンボル、アンコン丘から見下ろすパナマ市は、なにかニューヨークのマンハッタンを思わせるような。昔の面影を探そいけません。カルロスが詞した1950年代には、かったにちがいありましてここで生活していた僑ばれてきました。

諸用件を終えた帰SGI (Soka Gakkai 集会) に出席しました。回の滞在中のメンに感謝の言葉を述べでくれるならと、約500の物語」をスペイン語とこれにはパナマ大学で音楽を専攻するメンバー3人が、生演奏で応援してくれました。会場はスタンディングオベーション。止まらない拍手に、つい私もこの後に取材予定のメキシコ人作曲家による「ベッサムーチョ」まで歌うサービスをしたのでした。

パナマ人が作曲した歌をパナマ人の前でスペイン語で歌う。なんとという幸せ!なんとという榮譽! 文字通り「歌は世界の人々の心をつなぐ!」「歌は世界の人々の心を開く!」のです。



民族舞踊を踊ったメンバーと(中央が筆者)

ビル群が林立してしまうにもまったく残って「ある恋の物語」を作ビルなどほとんどなせん。どんな思いをしのだろうか、当時が

国前日には、現地のInternational)の記念私は特派員時代と今バーの協力とサポートたあと、みんなが喜ん人の前でこの「ある恋で歌ったのです。なん

